

森 鷗外「金毘羅」論

瀧 本 和 成

小説「金毘羅」は、明治四十二年十月一日発行「スバル」第十号に発表された。原稿用紙（四百字詰）約八十三枚の作品である。

「金毘羅」の執筆時期については、鷗外の「明治四十二年日記」からおおよそその手がかりを求めることができる。「金毘羅」に関する記述が、明治四十二年九月二十日付の日記に「江南文三金毘羅を取りに来たるに、まだ出来ざるによりて、椋鳥通信を与へて歸らしむ」とあるほか、同二十三日の記述に「金毘羅を草し畢る」、同二十五日「金毘羅印刷の事を商議す」、同二十八日「金毘羅を校し畢る」、同十月三日「昂に金毘羅出づ」といった具合に数ヶ所にのぼっている。これらの記述から「金毘羅」は、明治四十二年九月二十三日に脱稿していることがわかる。同日記に同年九月三日、前作にあたる「対話現代思想を草す」とあることから、長くても二十日ほどの執筆期間であったと推測できる。

この小説は、森鷗外の実際の経験の土台にして描かれた作品で

ある。それゆえに実生活との比較が重要な要素となってくる。まず、主人公の小野翼博士の足どりを中心に見ていくと、一月十日午前には彼は高松市での一週間の心理学の講演を終えて、その日のうちに琴平に到着している。その日は「琴平華壇」に泊まるつもりでいたのが、ふと気が変わり、金毘羅様に参詣しないで、午前七時には船上の人となる。約十時間を経て午前五時大阪に到着、午前八時三十分梅田停車場から二等の急行に乗って、夜東京新橋停車場に着き、人力車で駒込西片町の邸に帰ってくる。その夜、細君から長男半子（六ヶ月）の咳が告げられる。翌十二日からは駒込の自宅が舞台となり、物語の中心は小野博士と細君をどん底に落とした長男半子と長女百合の百日咳との闘いの日々に移っていく。そして二月五日、両親の手厚い看護もむなしく半子が死に、悲しみに暮れる間もなく二月七日には長女百合が危篤状態になる。八日には主治医の広沢教授にも見放されてしまうが、その翌日から奇蹟的に病状が回復してくる。そうして三月十日には百合が「床の上起きて据わ」れるようになることが告げられてい

る。これ以後、小野博士の細君はそれを金毘羅様を毎日拜んでいた御利益と信じてますます信仰を深めていくという結末に至っている。

これに対して、この作品の題材となった鷗外の実生活はどうだったのか。

「明治四十一年日記」によると鷗外は、各地方の兵営病院や兵舎等の視察のため、明治四十年十二月二十九日午前八時東京を発つて、午後四時名古屋に到着。翌三十日は、名古屋の兵営病院を視察。三十一日には、名古屋を発つて午後には石川県大聖寺、夕方には山代に到着。明治四十一年の「新年を加賀国山代の温泉宿蔵屋」にて迎えている。二日は、金沢の兵営病院を視察し、その日も山代で泊まっている。翌三日午後六時大聖寺を発ち、夜汽車に乗って浜寺に向っている。四日午前七時浜寺に着いた鷗外は、さっそく「兵営病院の仮舎」を視察し、午後七時には浜寺を発ち、汽車と船を乗り継いで、一月五日の午後一時琴平に到着している。その日は「琴平華壇に宿」とっている。六日は善通寺に赴き、兵営病院を視察。夜には船に乗り、翌日の七日「朝、大坂に着」いたあと汽車で泉州堺に行き茅海楼に泊まっている。八、九、十日と大阪での砲兵工廠、兵営病院を見学のあと、十日の「夜汽車にて帰途に就く」。また、この日の日記には鷗外の弟の死をつたえる「弟篤次郎耳科院に歿す」という記述がみられる。一月十一日午前九時新橋に着いた鷗外は、小説「金毘羅」の描写と同じく「二男不律八日より咳嗽すと聞く」と日記に書いてい

る。十四日には、弟「篤次郎を向嶋弘福寺に葬る」と記している。その後の二男不律と長女茉莉の病状に関するものは、二月五日（水曜日）「夕に不律死す」、三月十日（火曜日）「茉莉始めて起坐す」、三月十五日「家人等不律の遺骨を弘福寺に葬る」の記述がみられるだけである。

日記以外で作品に関連したものとしては、明治四十一年三月十一日、在パリ上田敏宛書簡に、

前便一寸申上候通弟死去の後長女茉莉二男不律百日咳に罹り二人共 Bronchopneumonie, Nephritis などいふ猛悪なる Complication あり不律は死去し茉莉も助からぬものと医師に宣告せられしに幸に茉莉のみは助かりさうにて余程好況を呈し候併し一月来今日まで咳嗽止まず候

という文面が残っており、森家を襲った不幸な近況を簡潔な文章で伝えている。

また、鷗外の母峰子の日記が伝える森家の様子は、この頃（明治四十一年一月）の記述の大半が、篤次郎の病状に費やされていて母峰子にとつての息子篤次郎の存在の大きさを示している。そして、一月二十一日をもつて日記は白紙となっており、不律の死の場面は記されていない。次に書き出すのは、春が近づくと共に「年来（より）の悪しきこと皆忘れたる様」な心持ちになり得た約七十日後の四月三日になってからのことである。

そのほか鷗外の妹小金井喜美子は、篤次郎の「埋葬が済むとお兄様は」①「世話する人達に挨拶して急いでお帰りになりました。

其頃まり子さんや不律さんが重く煩つて居られたのです。やがて不律さんはお気の毒にもお亡なりでした。其時の事はお兄い様の小説「金毘羅」に委しく書いてあります」と記している。

同じく鷗外の長男森於菟は、作品「金毘羅」とこの間の事情との關係にさらに詳しくふれて、「この間の家族の状況を見るに四十一年一月に叔父篤次郎が未だ壯齡(四十二歳)で神田小川町の賀古鶴所の院長たる耳科院に入院中喉頭の腫物のために斃れた。父は非常に力を落してその死の直接原因が致命的でない腫物からの出血を看護婦が仰向けに押えつけて吐かせなかつたための窒息なので「可哀そうな事をした。」としきりに悔み、その病理解剖に立会った時は父としては珍らしく平静を失って脳貧血を起こした。同年生まれた次男不律は乳児で死んだ。茉莉と不律の病気の事が「金毘羅」にあ」と述べている。

このように鷗外自身の日記や書簡をはじめとして母峰子の日記、妹喜美子の証言、長男於菟の言及を総合すると少なくとも作品「金毘羅」と実生活との関連性は否定しえない事実である。それでは鷗外がそれらを作品として形象化するとき、何を描き何を描かなかつたのか。

第一に作品世界の時間軸と重なっておこっている弟篤次郎の病と彼の病状に一喜一憂する日々を送っている母峰子や妹喜美子たちの姿が描かれていない。

第二に弟篤次郎の死もまたいっさい作品「金毘羅」の中で語られることがない。篤次郎の死は鷗外にとって何の痕跡も残さず通

り過ぎてしまふようなものではないことが、長男於菟の証言からものはっきりしている。

第三は母峰子の存在がまったく切り捨てられてこの物語が成立しているという点である。作品「半日」等で示される母峰子と嫁志げとの確執がこの小説では描かれなところか、母峰子の存在すらも語られることなく終わっている。

第四に長男於菟の存在もまたこの物語からは削除されている。

第五に鷗外は陸軍軍医局長として地方師団検閲のため名古屋、金沢、浜寺、琴平、泉州堺等の視察の旅に出かけているのに、この作品は登場人物を学者として形象し、彼の講演旅行先として琴平を設定している。

以上鷗外の実生活と小説「金毘羅」の内容をみた結果明らかにしたのは、この五点である。いったい鷗外は、実生活から琴平滞在と次男不律の死と長女茉莉の病気の顛末を題材として抽出し、作品中に再構成することによって、いったい何を描こうとしたのか、またそれはどのような方法で作品化されているのか。

二

小野博士の経歴は琴平を發つて大阪に向かう船の中で語られる。

博士は文科大学を一級の真中位の席順で卒業して、籍を某私立大学に置いた処が、所謂頭の好人なので、其学校の哲学科又は殆ど自分の物のやうになつて、間もなく洋行させら

れることになった。(中略)そこで下宿屋の二階に寝転んで、其頃むやみに掘り出される「青い花」の文学に耽つた。(中略)小野君が、羅曼底格の思想といふ論文を土産に持つて来たのは、かうしたわけである。

小野君の帰朝土産は博士の学位を以て酬いられた。併し小野博士に堅牢な哲学上の立脚地のないことは、其博士論文の縁起から推して考へて見ても、別に不思議はないのである。

小野博士は、東京帝国大学を卒業後、某私立大学に籍を置いたが、間もなくベルリンに洋行し、その地で「青い花」の文学の影響を大きく受け、その影響の下に書いた論文「羅曼底格の思想」により博士の学位を手中にしたが、未だに「堅牢な哲学上の立脚地」を持ち得ていない人物として描かれている。

小野博士が影響を受けたという「青い花」の文学」とは、ノヴァーリスを代表とするドイツロマン主義をさす。ドイツ留学中「青い花」という「羅曼底格」な理想を追い求めていた小野博士は、現在において「形式があつて内容がない」人物として描き出される。それはたとえば作品の中で彼が書く日記の内容をみるとよくわかる。

講義をする前には、参考書は随分広く調べる。そして(中略)自分の立脚地から、相応な批評を加へる。(中略)それであるのに、つひぞ人を感じさせた、人に強い印象を与へたと思つたことのないのが、気に入らない。事に依ると思つたまが紙の上の思想になつてしまつてゐるのではないかと思は

れてならない。それに博士は、自分の判断の標準になる立脚地といふものに満足してゐない。

小野博士は、大学の講義や今回の高松での心理学の講演は、「自分の判断の標準になる立脚地といふもの」のない「紙の上の弁舌」に過ぎないと考へる。それは小野博士の日常生活でも同じことがいえる。

博士は自分の書齋でも、目金を同じ処に置くのである。教場で目金を脱した時は、極まつて白墨の箱の脇に置くのである。(中略)火箸を取つて炭の歪んでゐるのを直して、火箸をきちんと揃へて、火箸の隅に立てた。火箸一つでも、立て様が極まつてゐる。立てる場所も極まつてゐる。

「形式があつて内容がない」生き方は、小野博士の生活そのものにまで浸透してゐるのである。ただ小野博士はそのことに対して自覚的である。

何か自分の生活に内容が無いやうで、平生哲学者と名告つて、他人の思想の受売をしてゐるのに嫌ないやうな心持がある。(中略)妻や子供の事を思つて見る。世には夫婦の愛や、家庭の幸福といふやうな物を、人生の内容のやうに云つてゐるものもある。併しそれも自分の空虚な処を充たすには足らない。妻も子供も、只因襲の朽ちた索で自分の機関に繋がれてゐるに過ぎない。あゝ、寂しいと思ひながら博士は寝た。こは小野博士が「自分の生活に内容が無い」ことを告白している箇所だが、その自覚は博士にとって実は「夫婦の愛」や「家

庭の幸福」が「自分の空虚な処を充たすには足りない」ものとして存在し、認識していることを意味している。

こうした小野博士の人物形象との関係で捉えておきたい人物に小川光がいる。小川は高松での講演の際、小野博士を招待した有志者の一人で、四国で中学教員をしている男である。

小川といふ男は人に逢つたときに、一応丁寧過ぎる程な挨拶をしてそれから段々家族的な詞を遣ふ。これが此男の交際家として重宝がられてゐる唯一の性質なのである。(中略)併しどこか頭が鈍いところがあつて、人を観察するといふことが出来ない。人にうるさがられても分らないことがある。それが此男の再び四国に舞ひ戻つた原因であるらしい。

この小川光は人に接する方法だけは身につけているが、人間への観察眼が伴っていない人物として描かれている。表面的で内実が伴わない点で小野博士と類似しているのだが、博士との決定的な違いは、自分自身まったくそれに気づいていないことである。したがつて、「形式があつて内容がない」生き方をしながらそれに對してまったく無自覚である小川光は、自覚的ではあるが堅固な立脚点をもたない小野博士の立場をより一層明確にする役割を果たしている。

小野博士の細君は次のように説明されている。

今は熊本に隠居してゐる、一頃京橋辺にゐた人の娘で、華族女学校を卒業したのだからルビの附いてゐない新聞位読める。算術も、此方に極不得手な博士よりは達者である。併し

物の道理を考へて見ることは教へられなかつたものと見えて、理性の方面は頗る薄弱である。博士の処へ来てから同じ博士仲間で、隣同志になつてゐる高山教授の奥さんと心安くなつて、子供が病氣なぞをすると、その奥さんに勧められて、虎の門の金毘羅へ祈禱を頼みに行く。それも念の入つた迷信をしてゐるのではない。隣の奥さんも行くから、自分も行くのである。考へて見て行くのではない。

彼女は「華族女学校」出身で、時々「虎の門の金毘羅」に詣ることがあるが、それは「高山教授の奥さん」に誘われるからで、「念の入つた迷信をしてゐるのではない。隣の奥さんも行くから、自分も行く」程度で、決して「考へて見て行くのではない」のである。奥さんは、目の前に起る現象を客観的に分析し、物事を論理的に判断する能力からは縁の遠い、「理性の方面は頗る薄弱」な人物として形象されている。

その細君が、長男半子と長女百合が病の床に就いた時、半子と百合に「被せてある布団」に早く治るようにと「金毘羅様に御祈禱をして戴いた」「赤いフランネルの切」を掛けるのである。それに對して小野博士は、金毘羅様を迷信だとして一蹴する他の信仰をもっていないがために、細君の行為に對して叱れないのである。もちろん哲学者としての面目に関わるから同意することも出来ない。「そこで博士は黙つて聞いてゐる」しかないのである。それは小野博士自身それにとつて代わるべき哲学者としての堅固な立脚点を持っていないからである。ここでも小野博士の外見だ

けをかるうじて整えようとする姿が、彼の自らの立脚点に起因するものとして描きだされている。

小野博士の細君が十日に見た夢のことを博士に告白する場面がある。一月十日の夜、細君が見た夢の内容は、二人の子供が湯の中へ落ちて溺れる、いわゆる「水難」で、姉の百合は運よく助かるが、弟の半子は死んでしまうというものだった。

そして、物語は博士の奥さんが見た夢が正夢であったことが最後で示される。

どんな名医にも見損ふことはある。これに反して奥さんは、自分の夢の正夢であつたのを、隣の高山博士の奥さんと話し合つて、両家の奥ではいよいよ金毘羅様が信仰せられてゐる。現代医学の権威者である広沢教授が百合さんは「とてもたすかない」と診察したにもかかわらず、長女百合が助かつたという事実によつて、奥さんにとつて金毘羅様が絶対的な意味を持つこととなつたのである。

それに対して、小野博士の方はどうか。

博士は百合さんの被布団の上に掛けてある迷信の赤い切を信じない。そんなら医者の口から出る、科学の食養生なら、絶対的に信ずるかといふと、さうでもない。養生や療治の事は、自分が知らないから、医者の方云ふとほりにしてゐる。併し絶対的に信じてゐるのではない。

小野博士から見れば、長男半子が「咳をし出し」、博士の細君が子供の溺れる夢を見た一月十日の夜とは、小野博士が金毘羅に

来ておきながら、それも「金毘羅は荒神だと申しますから、祟るかも知れません」などと小川光に言われながら、参詣せずに四圍を弄つた日の夜と符合する。それに加えて、細君の夢は子供が「溺れるといふ水難らしい夢」であつたということ。このことは、金毘羅が航海の安全を守る海神として古くから信仰されていることと呼応する。しかし、細君の夢が正夢であつても博士は金毘羅様を信じるにはいたらなかつた。そうかといつて科学に対しても「絶対に信じてゐるのではない」。

ここでも博士の生きる上での立脚点の危うさを指摘することはたやすいが、同時に視点を変えれば、それは宗教と科学の両方に対して一定の距離を置いた態度と見ることが出来る。その点から見れば博士の懐疑的な態度は、一方で相対的なものの見方が示されている箇所であるといえる。こうした態度が、医者が禁じている「牛と葱」を長女百合に与える契機を作り出したといえる。

このような視点から小野博士の態度に注目し、作品の主題にながて論じているのが竹盛天雄氏である。氏は、「人生の内容」を求めつつ、たえず『空虚』感を確認しつづけるべくアポリアを課せられている過渡的な存在^①である小野博士の、しかし「そのために「因襲」にとらわれず「杓子定木」に走らぬ処方をとつていくという合理的現実主義^②」に立つ知識人としての姿勢に支えられた思想小説^③としてこの作品をとらえている。

しかし、「金毘羅」は、小野博士の思想的な立脚点の問題を中心に据え、長女百合の奇蹟的な回復と結びつけることによつて小

野博士の「合理的現実主義の姿勢」^⑧というべきものを描きだすことだけを意図した作品なのだろうか。

三

この問題を考察していく上で、草野柴二訳アナトール・フランクス「ピュートア」(明治四十二年九月「太陽」という作品とそれについて述べた石橋湛山の論評は、大きな意味を持つてくると考えられる。

「ピュートア」という作品は、浮図した行き懸りから一婦人の言い出した架空の名前が、段々實在性を得て来る経過を書いたもので、畠泥棒や、女を唆した人間の知れないのを、皆ピュートアの仕業に持つて行く、警察で捕縛に苦心し出す、満都の人が騒ぎ出す、終には初めに言い出した婦人までが、其の實在を信ずるに至るといふ物語である。

この作品について石橋湛山は次のように述べている。

『太陽』にアナトール・フランスの短篇「ピュートア」が訳出せられてある。草野柴二氏の筆である。(中略)私の考では、ピュートアは独り歴史とか、神話とかに当るもので無くして、我々が始終接触し、意欲しておる一切の實在の性質の説明であると思う。

(「九月の教学界」(明治四十二年十月号「早稲田文学」)そして、「ピュートア」と鷗外の「金毘羅」とを結びつけて次のように論じている。

私は凡ての實在というものは此ピュートア式であるように考えられる。吾々が認めて事實也と實在也と決める事は或る自分の経験の説明であつて、(中略)そう説明しなくては他に説明の仕方がないという心持である。前の「金比羅」の例で言うると、細君が金比羅を信ずるに至つたのは、その自身の生活に入つて来た、夢の事實や、又夢の通りの出来事に対する説明として、金比羅を持つて来た訳だ。(中略)故に他の信ずる實在を頭から否定する事は出来ない。唯何物も實在と認める事が、最も此生活に適しているかという点で、道德だの宗教だのが銘々の生活に不便ならば、新しいところに現實を求めて行くが可い。だから、過去のものは空想で役に立たないとは言えない。その時代にあつては立派に現實であり、實在であつたのだ。

(「空想も現實も共に現實也」「文章世界」(明治四十二年十一月号))石橋湛山は、アナトール・フランスの作品「ピュートア」で、ピュートアなるものは「一切の實在の説明である」として、私たちが事實や實在を決定する事は「或る経験の説明」に過ぎないものだと言張している。ここに湛山のプラチカルな認識をみとめることができるが、さらに、湛山はこのアナトール・フランスの「ピュートア」と鷗外の「金毘羅」とを関連づけ、小野博士の細君にとつて金毘羅様は過去のもの、「空想で役に立たない」迷信では決してなく、彼女にあつては「立派に現實であり、實在」として機能しているとして、この小説での細君の描かれ方に「ピュート

ア」と同様「空想も現実も共に現実」であるとするとプラチカルの認識を示した作品であると指摘している。

「金毘羅」は、琴平行きと次男不律の死と長女茉莉の大病という実生活の体験を題材として、小野博士の思想的な立脚点の危うさを描き、日本近代知識人の思想的脆弱さを指摘している。また、西洋医学にも心酔せず、宗教心ももたない小野博士を描くことによって、近代主義としての科学、封建的遺産としての宗教、そのどちらにも一定の距離を置く相対的なものの見方、態度を提示している。その一方で長男半子の死と長女百合の奇蹟的な回復、それを契機とした細君の夢の話、それらと金毘羅とを結びつけることによって細君の信仰に至る過程を描きだしている。細君が見た夢の顛末が現代医学の権威者広沢教授にも見放された百合の回復という事実により正夢となってしまうこと。以後細君にとって金毘羅様は今回の不幸な事件を全て説明するものとして存在し、现实生活のなかに機能することになる。こうした細君の描かれ方は、現実社会にあって一つの空想世界が現実性をもった実在として認識されるという鷗外のプラチカルな認識^④を指し示している。つまり、この作品は、細君の金毘羅様を信仰していく過程を単なる迷信ではなく「現実であり、実在」の世界として描いてみせることによって小野翼博士の近代科学と宗教に対する懐疑的な態度までを相対化してみせたのである。このような作品「金毘羅」にあらわれたプラグマティズム的な認識と方法は、作者鷗外が「学

問も因襲を破つて進んで行く。一国の一時代の風尚に肘を掣せられてゐては、学問は死ぬる」^⑤、「学問の自由研究と芸術の自由発展とを妨げる国は栄える筈がない」というように、一つの価値観を押し付けようとする社会・国家権力に対して批判精神となり得るものを包含していると考えられる。

〔注〕

- ① 「現代思想(対話)」と題して「太陽」(第十五卷第十三号・明治四十二年十月一日発行)に掲載された。
- ② 山崎国紀編『森鷗外・母の日記』(一九八五年十一月 三一書房)。
- ③④ 小金井喜美子『森鷗外の系族』(一九八三年十一月 日本図書センター)。
- ⑤ 森於菟「父親としての森鷗外」(一九六九年十二月 筑摩書房)。
- ⑥ 弟篤次郎がモデルとして登場する作品に「本家分家」(昭和十二年三月 岩波書店『鷗外全集』第三卷へ大正四年八月十八日の日記に「本家分家を押し擧る」という記述がみられる)がある。
- ⑦ 鷗外は「妄人妄語」(大正四年二月 至誠堂書店)中に「Romanik派の所謂青い花は、Novalisの小説を読んで見れば、情の上から其匂を知ることは出来るが、彼派が智の上からそれをどう説いて居たかといふことは、一寸文学学などを覗いて見ても分らない。(中略)愛といふものが人生の大事で、これに特別な説明が下してある。即ち「Das irdliche Heiligtum des irdischen Lebens, auf welchem deraelteste goetliche Segen ruht und das zugleich die Grundlage bildet, auf welche das Heil der Geschlechter und der Nationen

in ihrer sittlichen Wohlfahrt gegründet ist"といふのだ。夫婦の愛から母子の愛が出る。兄弟姉妹諸眷属の愛が出る。こゝに家族合同 Familienverein が成り立って、教育の基礎が据わる。此愛に伴つて来るものが、感奮 Begeisterung と保恋 Sehnsucht との二つだ。感奮は彼の敵愾心などのやうに、或る思想を把握して兼て其実行を期するのび (Erfassen eines Gedanken zugleich auf seine Verwirklichung gerichtet) 保恋は只管向上の道を踐むのだ。理想の影を追ふのだ。そして此保恋の対象が即ち青い花だ、不可思議の碧華だ。〔明治三十七年二月十日「萬年艸」巻第十一初出〕と述べ、「青い花」に代表されるロマン主義文学は、空想界の愛というものを第一義(「人生の大事」とし、その理想を求めて追い続ける。すなわち、その(愛という)理想の象徴が「青い花」だと分析している。

⑧⑨⑩ 竹盛天雄『鵬外 その紋様』(一九八四年七月 小沢書店)

⑪ 鵬外は「新思潮」(第一巻第二号・大正三年三月)に「舞踏」(アナトール・フランス原作)を訳している。

⑫ 石橋湛山とプラグマティズム思想については、上田博「石橋湛山論―出発期の文芸・社会批評―」(立命館大学「人文科学研究所紀要」第三四三号・一九八七年三月)に詳しく論じられている。

⑬ 鵬外のプラグマティズムに関する言及は、小説「かのやうに」中で五条秀麿に次のように語らせている。「君のかく画も、どれ程写生したところで、実物ではない。嘘の積りがかいてある。人生の性命あり価値あるものは、皆この意識した嘘だ。第二の意味の本当はこれより外には求められない。かう云ふ風に本当を二つに見ることは、カントが元祖で、近頃プラグマチスムなんぞで、余程卑俗にして繰り返して

ゐるのも同じ事だ。」

ここで鵬外は、ハンス・ファイヒンガーの『チイ・フィロゾフィ・デス・アルス・オップ』の「人間の思考のさまざまな概念は、知識と生活をよどみなく目的に働かせるために採用された(補助概念)であり、(有効な)擬制、虚構であるとの立場をとり、一般に経験界は(人類の理論的・実践的・宗教的擬制の体系)のうえにたてられた Als-ob (つまり、かのやうにの世界である) (岡崎義恵) という主張を秀麿に語らせて、プラグマティズム的な現実認識を指し示し、それを文学観と結びつけようとしている。

また、「里芋の芽と不動の目」(「スバル」第二年第二号・明治四三年二月)という小説においては主人公増田理学博士の「里芋を選り分けるやうな」もの見方をとおしてプラチカルな生き方を提示している。

⑭ 「沈黙の塔」(「三田文学」第一巻第七号・明治四三年十一月)

⑮ 「文芸の主義」(「東洋」第五号・明治四四年四月)〈初出時は「文芸談片」と題して掲載された〉

※ 鵬外本文の引用は『鵬外全集』(一八七一一七五 岩波書店)によるが、旧字体は新字体に改めている。

(たきもと・かずなり 本学大学院博士課程)